



月刊 千葉労働

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043 (222) 7207 番

98.10.22 No. 4865

旧国鉄債務処理法案の成立弾劾

1047名闘争—JR結託体制

との闘いは、いよいよ正念場に！

10月15日、旧国鉄債務処理法案が成立が強行された。これは「国鉄改革」が大失敗に終わったツケを国民と国鉄労働者に払わせようとする許すことのできない反動法案だ。

●何ひとつ解決つかず

そもそも28兆円問題は、今回成立した法案でも何ひとつ解決の道筋がついたわけではない。法案は、一本1円のたばこ特別税、郵貯特別会計からの繰り入れなどにより、毎年発生する六千億円の利払いによって債務が膨れあがる状態に歯止めをかけたに過ぎない。また、当初案の半額となった千八百億円のJR負担は、国鉄時代の年金積み立ての不足分に当てられる。

結局、旧国鉄債務の元本二兆五千億円は、国の一般会計の債務に付け替えられ、「歳入・歳入努力により、60年かけて返済する」と定められただけで、何ひとつ具体的なメドはたっていない。ちなみに、この二兆五千億円が加わった結果、一般会計全体が抱える国債残高は二兆八兆円に膨れあがっている。

●怒りが込み上げる

国鉄分割・民営化はまさに大破産したということだ。そもそも「国鉄債務問題の解決」などは、はじめから眼中になかったのだ。このようなペテンを煽りたてつつ、国鉄労働運動を潰し、総評を解体することだけが目的だったということだ。分割・民営化攻撃のペテンは引き剥がされ、その本質が隠しようもなく明らかになった。改めて怒りが込み

あげてくる。

●いよいよ正念場に

政府・自民党は、長期債務処理法案の成立を契機として、一〇四七名闘争に対する解体攻撃を激化させようとしている。5・28判決をふり下ろし、「法案成立—清算事業団解散までがラストチャンス」という恫喝で国労を攻めたてているのだ。一方国労内からも、この攻撃に膝を屈し、自らの手で国労を解散するに等しい画策を行う動きが台頭している。

法案の成立により、清算事業団は今年22日に解散し、残る業務は鉄建公団に引き継がれるが、国労本部の一部執行部は、「今解決を図らなければ取れるものも取れなくなる」という論理で、国労全国大会で突如提起された「補強案」（国鉄改革法の承認や国労の名称変更、JR連合との統合等を含めたもの）を押し通すために、12月にも強引に臨時大会を開催しようとしているのである。

●窮地にたつJR総連

また法案の成立は、JR総連・革マルをも窮地にたたせている。使い捨てられる時期が迫っていることを感じとり、またぞろ「国労の最後の解体」を叫びたてはじめているのだ。「平和共存を破壊しろ」「職場での親和会、同期会、旅行会等を解消しろ」「家庭訪問により国労脱退させろ」というのが、彼らの秋一年末の方針だ。闘いは勝負のときを迎えた。今こそ危機に揺らぐJR体制を打倒しよう。

家族会第一九回連続講座開催

「核廃絶の道はどこに？」

ヒロシマ・ナガサキを二度と繰り返さないために

10月18日、家族会は第19回連続講座を開催。講師に渡辺寿子さん（原発いらない千葉ネットワーク）をお招きし、お父さんでもちよつとむずかしい「核廃絶の道はどこに？」を勉強しました。

講座は、はじめにNHK広島制作のビデオ「姿なき核開発」を上映し、冷戦後とくに湾岸戦争後のアメリカの核政策・核開発の危険性をわかりやすく学びました。渡辺さんは、「冷戦が終結したのに、世界の現実には核廃絶どころか核戦争の危機にたっています。NPT（核不拡散条約）、CTBT（包括的核実験禁止条約）の下で、



むずかしいけれど、真剣に学んでいる様子

インド・パキスタンの核実験にみられるように、核は拡散し核保有国は冷戦時代と違ったかたちで、あらたな核開発を推進しています。アメリカはCTBTへの参加で「核爆発実験」をやめると宣言する一方で、核兵器研究に膨大な予算をつぎこんでいます。CTBTは最初、すべての核実験を禁止するはずだったが、いつのまにか爆発を伴う核実験の禁止に限定されてしまいました。コンピュータシミュレーションや爆発を伴わない未臨界実験により核兵器を維持し、高度化していきけるとの見通しをふまえて、アメリカはCTBTを押し進めたのです。日本はどうかというところ、原爆大国となり、核の平和利用の道を隠れみのにプルトニウム利用の道を強引に突き進むようになりまし。青森県六箇所村に核燃サイクル施設の建設に着手し、高速増殖炉「もんじゅ」を稼働させ、使用済み燃料から高純度プルトニウムをとりだすための再処理工場も建設中です。日本が進めている戦争体制と、ひそかに進められている核武装準備。私たちが二度とヒロシマ・ナガサキの惨禍をくりかえしたくないと思うなら、この戦争政策をつぶすためにあらゆる闘いをしていかなければならないと話されました。

講座終了後交流会を行い、和やかなうちに終了しました。